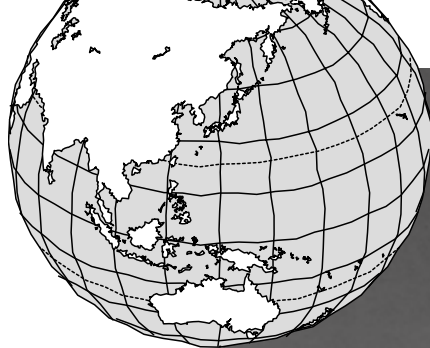




2

なかまつお米づくり隊！ ～広げよう笑顔！～

報告者 熊本県阿蘇郡南阿蘇村立中松小学校 教諭 山下 洋 先生

活

動のポイント

南阿蘇村は、世界最大級の阿蘇カルデラの中に位置し、南阿蘇湧水群など数多くの湧水地、樹齢400年を超える一心行の大桜、特定希少野生動物に指定されているオオルリシジミ等、風光明媚な恵まれた自然環境を誇っている。そして、自然の恵みをもとに基幹産業としての農業を中心に観光業も盛んで、まさに、阿蘇という大地とともに人々の暮らしが息づいている地域である。



樹齢400年を超える一心行の大桜

本校の児童は、4年生までに生活科や総合的な学習の時間を通して、阿蘇の自然やそこで暮らす人々と触れ合い、そのよさや素晴らしさに気づき、誇りと感じるようになるため地域学習に取り組んできている。

そして、5、6年生では、その学習成果を生かして「なかまつお米づくり隊」という単元を設け、稲作を通じて人々に笑顔を広げる活動に取り組んでいる。一昨年度は、収穫した米を、アフリカのマリ共和国への救援米や東日本大震災で被災された方々への支援米として送り届けたり、地域の独居老人へ赤飯にして配布したりする活動に取り組んだ。特に、マリ共和国への救援米送付活動は、10年ほど前から、国際貢献として、当時の児童会や担当教諭が発起し、現在まで受け継がれ、5、6年生の伝統行事となっている。しかし、ここ数年、マリ共和国に「なぜ救援米を送るのか」という目的意識が薄れ、ただ単に「伝統だから」「去年もやったから」という意識のみの活動となりがちであった。その一因としてアフリカやマリ共和国について情報が少なく、児童にとって身近な問題としてとらえ切れていないことがあげられた。

そこで、この課題を解消するために、次のような学習過程を設定して、特に③の情報収集の過程に力を入れ、実践した。

- ① 「なかまつお米づくり隊」でどんな活動をするのか見通しをもとう。
- ② 米づくりの体験をしよう。
- ③ 収穫の見通しから、実践したいことを具体的に決め、実行するための方法を考え、そのために必要な情報を収集しよう。
- ④ 集めた情報をもとに、整理し、相手意識をもって実践しよう。
- ⑤ 実践したことをまとめ、振り返ろう。

① 「なかまつお米づくり隊」の学習見通し

6年生は、昨年度、稲作活動の体験をもとに米づくりの大変さ、収穫の喜び、地域貢献・社会貢献の大切さを学んだ。そのため、その経験から、今回の稲作活動がさらに有意義な活動へと発展するために、前年度の成果と課題を出し合い、学習を進めていった。

そして、5年生との合同学習において、前年度の稲作活動の説明やアドバイスを行った。収穫したもち米を、救援米（マリ共和国へ）、支援米（宮城県東松島市へ）、地域貢献米（ふれあいもちつき、独居老人宅への赤飯配布活動）として活用したことによって、たくさんの笑顔を増やすことができたことを説明した。5年生からは、稲作活動についての質問をしたり、もち米の活用方法について抱負を述べたりして、学習活動への見通しをはっきり持った。



前年度の活動について説明する6年生



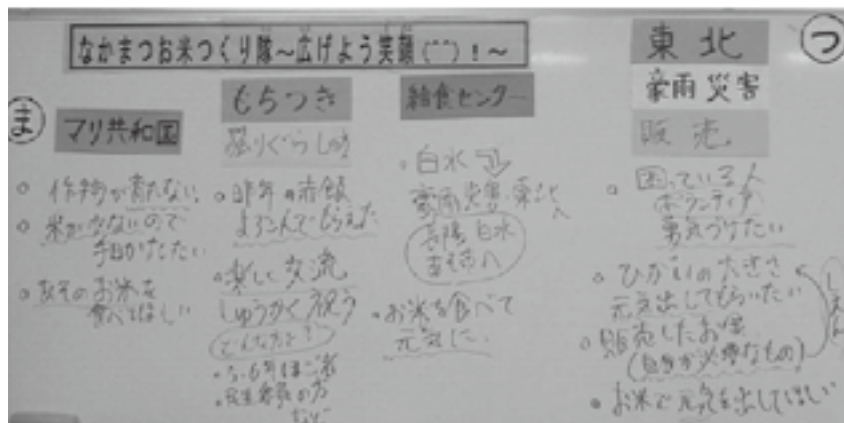
田植えをする5、6年生

② 米づくりの体験学習

5年生は社会科や理科の学習と関連させながら、種籾まき、苗の観察、代かき、田植え、有機栽培のための鯉放流、稲刈りなど稲作栽培全般について取り組んだ。田植え、稲刈りなどの活動は、6年生と合同で行い、5、6年生が協力し合う姿があった。

③ 収穫の見通しを踏まえた有用な情報収集

収穫するもち米の使用方法について児童一人一人が取り組みたい活動を考え、前年度の課題や疑問点を話し合い、課題別グループを異学年で編成し、調べる内容や方法について話し合った。その結果、「マリ共和国への救援米送付の継続」「7.12九州北部豪雨災害被災者への支援」「3.11東日本大震災被災地への継続的支援」「地域貢献



学習の見通しを立て課題別班を編成

として独居老人への赤飯配布」「地元の給食センターへの米の寄付」の5つの取り組みについて探究活動を行うための課題別班を作った。

課題別班ごとで課題解決の方法を考え、関係機関や関係者、電話やメールなどを駆使して情報を収集していった。しかし、マリ共和国への支援米についての班はインターネットで調べる以外、情報がほとんどない状況であった。そこで、日本ユニセフ協会に尋ねたところ、マリ共和国で実際に救援活動をされた職員の方が、ゲストティーチャーとして話をしていただけることとなった。もちろん、本校は遠隔地にあるため直接教室へ迎えることができないので、インターネット回線を利用したテレビ会議システムを活用した。

1回目のテレビ会議では、ユニセフがどのような活動をしているのかをまず理解することを目標にした。ユニセフの職員の方がクイズや写真などを準備され、飢餓や病気に苦しむ世界の子ども達を救済するためにどのような活動をしているのか具体的に伝えていただいたので、児童の興味・関心が一気に高まった。2回目のテレビ会議では、マリ共和国で実際に活動されていた方に現地の飢餓の状況をはじめ、不衛生な水の飲用によって命を脅かされている子どもたちがそこにたくさんいることを写真や図を使って分かり易く説明していただいた。その情報に接した児童たちは、飢餓や不衛生な水の飲用が切実な問題であることを実感していた。また、その職員の方から、これまで取り組んできた救援米送付活動がいかに素晴らしい活動であるのかを示し、認めていただいたことから、児童は救援米送付活動をさらに頑張りたいという意欲をかきたてられていた。



第1回目のテレビ会議の様子



ユニセフの活動について質問をする児童



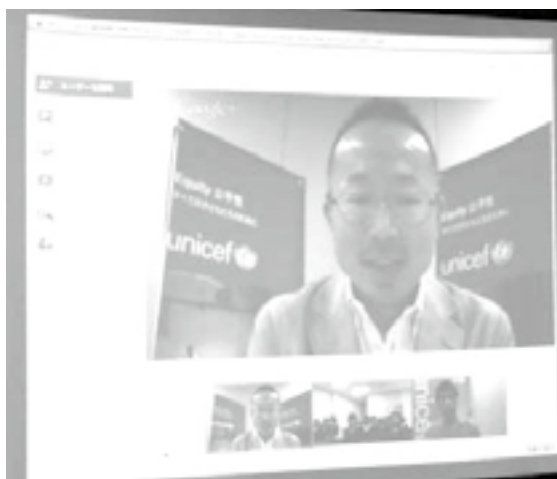
第2回目のテレビ会議の様子



マリについて質問をする児童

2回目のテレビ会議を終えた2週間後、稲刈りを5、6年生で行った。今回の収穫量は天候不順のため、前年の約半分程度に減少してしまい、児童は落胆の表情だった。そのような状況下で3回目のテレビ会議を実施した。

3回目の会議では、日本ユニセフ協会学校事業部とユニセフ東京事務所、そして本校の3か所を同時に中継しながら、スーダンや北部アフリカ、サヘル地域の現状とユニセフの支援について二人の職員の方から話を伺うことで、児童たちの意識の中で、ユニセフの活動と現地で活動された方々の具体的な支援、そして自分たちの救援米送付活動が「命を支える」という線で結ばれたように感じた。また、今回、米が不作だったことで、救援米の量が減ることを心配していた児童から、救援米の他にも何かできることはないかという質問を投げかけた。二人の職員の方から、それぞれの視点で助言をいただき、その助言をもとに新たな活動へと展開していった。



第3回目のテレビ会議の様子

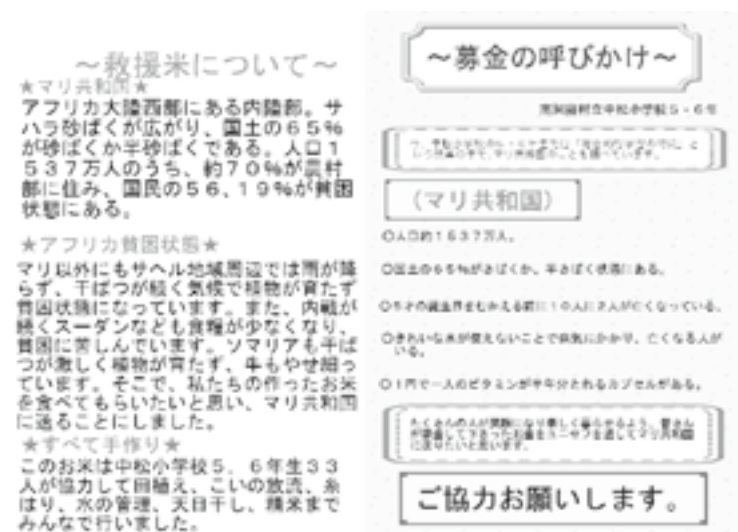


今後の取り組みについて助言を受ける児童

④ 集めた情報をもとにした自分たちにできることの実践

○ マリ共和国やサヘル地域をみんなに知ってもらい、募金活動しよう。

今回のテレビ会議によって、救援米送付だけではなく、募金活動やマリ共和国を含むサヘル地域について学習したことをまとめ、横断幕やチラシ、タスキ、募金箱を作ったり、CMを自主制作したりして、学習発表会や観光客が多く訪れる場所の一角でアフリカの現状を情報発信し、募金活動を実行した。



児童が作成した配布用チラシ



横断幕にメッセージを書く児童



自作CMでメッセージを伝える児童



募金活動の様子



送料を得るための米販売の様子

○ 復興もちつき大会へもち米を届けよう！

7. 12の九州北部豪雨で被害にあった阿蘇市の方々を「少しでも勇気づけたい」「元気になってもらいたい」という思いで、阿蘇市の仮設住宅にお住まいの皆さんに、メッセージを添え、もち米をプレゼントして、復興もちつき大会に使用していただいた。



復興もちつき大会の様子

○ マリ共和国と宮城県東松山市の給食センターに米を送ろう！

遠隔地への送料を得ることをねらって、収穫したもち米を一部販売した。その収益をもとに、1月上旬、自分たちで栽培したもち米をアフリカのマリ共和国へ送った。さらに、前年度に続き、宮城県東松山市の給食センターに支援米を送ることもでき、東松山市の小中学校の給食で使用していただいた。

○ 中松校区の独り暮らしの方を笑顔にしよう！

児童の企画による「ふれあいもちつき大会」を行い、地域の方々と笑顔で交流しながら、もちをついたり、赤飯をつくったりして直接触れ合うことができた。さらに、独り暮らしのお年寄りのお宅を訪ね、赤飯を配布して喜んでいただいた。



マリと東北へ送付する当日、願いを込めて記念撮影



赤飯を配布している児童

⑤ 実践のまとめと振り返り～児童の感想から～

- 私たちが送る米で大勢の人を救うことができると聞き、救援米を送る活動はとても大切だったと改めて思いました。これからもずっと続けていきたいです。（第2回テレビ会議後の感想）
- 食べ物も水も不足している地いきでがんばって生きようとしている人たちを知って、苦しんでいる人達の力になりたいし、その人たちを助ける活動に自分から進んで取り組みたいと思いました（第3回テレビ会議の感想）
- 知らない人が募金してくださいました。阿蘇の募金はたくさんのやさしい気持ちでいっぱいなんだなあと思いました。このお金でマリ共和国やサヘル地域の人たちをすくいたいです。
- 雨の中での募金活動や米販売は大変でしたが、いろんな方が「がんばって」と声をかけてくれて、とてもうれしくて達成感でいっぱいになりました。これからもいろんなことに取り組んでいきたいです。
- ぼくはこの活動でたくさんの人への感謝の心を学びました。このお金やお米でたくさんの人たちが笑顔になるといいです。来年もがんばりたいです。

おわりに

児童たちは、自らの手で収穫したもち米を使い、自分たちと直接的、間接的に関わりのある人たちへと笑顔をひろげようという目標を掲げ、意欲的に取り組んできた。特に、被災された方々が少しでも元気になってもらいたいとの思いで、東北や阿蘇市の被災地にもち米を届けることができたのは子どもたちの自己有用感を高め、自分たちも笑顔になっていった。

さらに、ユニセフの方と直接対話することができたことで、自分たちがこれまで取り組んできた救援米送付活動が、アフリカの人々の命を救うすばらしい活動であったことを改めて認識できた。また、天候不順のため、米の収穫量減少という現実と直面した際も、ユニセフの職員の方々にヒントを与えていただいたことで、その後の活動を工夫し、それまで取り組んでいなかった募金活動や、配布用チラシ・自作CMによる情報発信など意欲的な活動へと展開していった。ユニセフの方の実体験を聞いた児童たちが、アフリカの子どもたちの置かれている現状を自分たちの身近な問題としてとらえることができるようになったときこそが、アフリカの子どもたちの問題が本校の児童たちの問題として重なり合い、確かにつながりはじめた瞬間だったと思う。

今年は、昨年に比べ、稲作活動をさらに意欲的に取り組んでいる。それは、アフリカの子どもたちをはじめ、たくさんの人たちの笑顔を思い浮かべながらさらに多くの人々に笑顔の輪を広げていきたいという気持ちの表れであるように感じている。